
吸血鬼に恋してみない？

ほしの すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼に恋してみない？

【Nコード】

N8867U

【作者名】

ほしの すばる

【あらすじ】

バンパイアであるリフィーサ・ミシュリーネは、ヒューマン症候群という人間になってしまいうバンパイア特有の病気にかかってしまう。治療のために来日したりフィーサが北見沢統子という人物を尋ねていくとすでに他界しており、曾孫の征十郎がただで……。

第1章

リフィーサ・ミシユリーネはどこまでも果てしなく続く築地塀を横目に、大きな四脚門の前に立っていた。

門扉の横には、北見沢道場と達筆な文字で書かれた看板が掲げられている。

「どうやらここで間違いなさそうね」

リフィーサは夏のきつい日差しを背中に感じながら、小さく吐息をもらす。金色に輝く長い髪を一度かきあげてから、旅行用のスーツケースを片手に、母屋へと誘う石畳を歩き出す。ワンピースの裾が軽やかに揺れ、サンダルのヒールがリズムを刻む。

「うちに何かご用か？」

ふいに声をかけられ、リフィーサは一瞬体を硬直させた。そして、ゆっくりと声のする方向へ振り向く。漆黒の髪を無造作に一つに束ね上げた、道着と袴姿の体躯の良い青年が母屋の角先に立っていた。右手にキュウリとトマトが入ったザルを持っている。年の頃は十七、八歳といったところだろうか。

「あなた、この人？ 私、北見沢統子という人に会いに来たのだけど」

リフィーサが問うと、青年は驚愕して持っていたザルを落とす。キュウリとトマトが地面に散乱する。

「も、もしかや入門希望者か？」

「え？」

「さすがは大ば様だ。異国の地にまでその名を馳せるとは。うちの道場も有名になったものだ。父上と母上の武者修行の旅もムダではなかったということか！」

青年は興奮した様子で駆け出し、リフィーサのか細い右手を握りしめた。

「歓迎するぞ！」

「な、何をするの？ 放しなさい！ 人間風情が気安く私に触らないで！」

激昂したリフィーサは右手を振りほどくと、そのまま青年の頬に平手打ちを放つ。

乾いた音が閑静な庭に木霊した。

「大ばば様の客人に無礼なことをしてしまつて大変申し訳ない！」

きたみざわせいじゅう

北見沢征十郎は自分の犯してしまつた過ちを素直に認め、非を詫びた。畳に額を擦りつけ、何度も謝罪の言葉を連呼した。

庭に面した座敷に通されたりフィーサは、上座に座つて征十郎を冷やかに見下ろしていた。障子は開け放たれており、池で鯉が跳ねると涼しげな音を立てた。

「私の方こそ気が動転してしまつて、つい」

征十郎に比べると、抑揚のない謝罪だった。碧い双眸にはまだ怒気が残っている。もう二、三発引っぱたいくらいではこの怒りは治まらないだろう。

きたみざわとうじ

「それにしても、北見沢統子^{きたみざわとうじ}が他界しているなんて知らなかった」

リフィーサの呟きにも似た小さな声に、顔を上げた征十郎は表情に翳りを見せた。

「もう十年前の話だ」

「あなたは統子の血縁者よね？」

「俺は曾孫だ」

「そう。じゃあ早く部屋へ案内してくれるかしら？ 私、長旅で疲れたの」

「部屋に案内とは、どういう意味だ？」

征十郎は首を傾げた。

「もついいわ。自分で探すから」

長旅の疲れからか、征十郎の対応の遅さに苛立ちを感じたリフィサはそう言つて、ロウカに出る。

次々とふすまを開けていくリフィサ。その後を追いかけては、開けっ放しになったふすまを閉じていく征十郎。先刻の非礼もあつて、無下に引き止めることができずにいたようだった。

「さつきから何をやってるのだ？」

「私の部屋を探しているのよ」

リフィサが木製の洋風扉に手をかけると、征十郎が叫んだ。

「その部屋の扉は開けるな！」

リフィサは征十郎の制止する声を見捨てず扉を開けた。そこには日本家屋には不似合いなロココ調家具で統一された乙女チックな部屋があつた。

「いい部屋があるじゃないの。私ここにするわ」

リフィサは天蓋付きのベッドに腰を下ろした。

「ここはダメだ。姉上の部屋だ」

「だったらその人には別の部屋に移ってもらつてちょうだい」

「いや、姉上はもう嫁いでいるので、この家にはいないのだが」

「だったら問題ないでしょう」

「大ありだ。姉上はこの部屋をこよなく大切にしている。他人が侵入したと知ったら……。と、とにかく急いでこの部屋から出るのだ」

顔面蒼白の征十郎はリフィサの右腕を引っ張った。

「ちよつと、私に触らないでと言つたでしょ！」

しかし、征十郎は詫びる様子もなく、無言で室内からリフィサを引っ張り出した。透き通るような白い頬を赤く染めて激昂したりフィサは、空いた左手で征十郎の頬を叩きつけようとしたが、難なく阻止された。

「今回の無礼はおぬしにある。だいたい俺はおぬしが誰なのか、い

「つたい何の用で当家に來たのか、何も聞かされていない」

「私、歸る。お父様が日本に行くのならここで生活すればいいって言ったから來たのに、こんな仕打ちを受けるとは思わなかったわ」

駄々をこねたあげくに父親に叱られてすねた子供のような反応に征十郎は戸惑った。これでは征十郎が完璧に悪者扱いである。

「いや、俺はただ」

「もういいわ。イギリスに歸るから、放してちょうだい！」

リフィーサは征十郎の手を振りほどき突き飛ばす。征十郎は壁に押し付けられる形になっただけで、転倒することはなかった。それも面白くなかったのか、リフィーサは無言で睨みつけると、そのまま来た口ウ力を足早に戻っていく。

「お、おい」

リフィーサを引き止めようとした征十郎だったが、隣の自室から電話の着信音が鳴り響き、舌打ちする。電話の相手がわかつているような面持ちで。

リフィーサは玄関に向かい、格子戸に手をかけた。すると、格子戸の向こうからキュウリを片手に持った青年がひょっこり入ってきた。

「おい、征十郎。玄関前に野菜が散乱していたぞー。って、あれ？　かわいい女の子発見。珍しいねえ。こんな寂れた道場に、金髪美人がいるなんて」

青年は目を瞬かせる。

品定めでもするかのように上から下まで見つめられ、リフィーサは不快感を露わにし、嘆息した。

（日本にはまともな男はいないのかしら？）

「まさか入門生ってことはないよね？ どう、彼女？ こんな古臭い道場にいないでさ、俺とどこか遊びに行かない？」

青年は外国人であるリフィーサに臆することなく、日本語で誘ってくる。

今度はリフィーサが青年を品定めする番だった。

服装はパーカーとカーゴパンツ。髪は茶色に染めている。片耳にはピアス。どこにでもいそうな軽薄な日本人。第一印象はそんなところだろうか。征十郎と同じくらいの年齢のようだが、堅物な彼とは正反対のように思えた。

「あなた、私のことが好きになったの？」

「さすがは碧い瞳のお嬢さん。言うことがストレートだねえ。けど、そういうのは嫌いじゃない。そうだな。俺はキミに一目惚れしてしまったみたいだ」

「……そう」

リフィーサは口元に笑みを浮かべると、ワンピースの胸元から小さな一枚の赤い紙を取り出し、それを額に貼りつけた。赤い紙はまるで体の中に吸い込まれるように消滅していく。碧かったリフィーサの瞳は真紅へと変貌していき、可憐な指先が青年の頬へと伸びていく。

「ふーん、俺なんかの血を吸うために貴重な血ケットを使ってもいいのかなあ」

「！」

リフィーサは咄嗟に青年から離れる。

「あなた、何者？」

「世界平和を夢見る、極フツーの人間」

深津弘臣と名乗った青年は破顔してキュウリを一口かじった。

「弘臣！」

遅れてやってきた征十郎が一喝した。

「おー、征十郎」

「おー、ではない！ 貴様、何をした？」

「俺はまだ何もしてないぜ。な、お嬢さん？」

同意を求められ、リフィーサはぶいとそっぽを向く。

「まったく、久しぶりに顔を見せたかと思えば、節操なしに女性に手を出しおって」

「心外だなあ。俺は落し物を届けに来てやっただけなのに。ま、お取り込み中みたいだから、今日は帰るとするか」

弘臣は食べかけのキュウリを征十郎に渡すと、ひらひらと手を振りながら玄関を出ていった。

（あの男、血ケツトのことを知っていた？）

リフィーサは弘臣が出て行った玄関の格子戸を凝視した。

「っ？」

刹那、格子戸がぐにやりと歪んで見えた。いや、格子戸だけではない。心配そうに覗き込んでくる征十郎の顔も歪んで見えた。

リフィーサは右手で自分の視界を覆う。

副作用。

イギリスを発つ前に母から言われた言葉が脳裏をよぎる。

（確か……）

思い出そうとするが、思考回路が働かない。

そんな時。

一度は閉ざされた格子戸が勢いよく開いた。弘臣が戻ってきたのかと思いきや、入ってきたのは殺意を漲らせた亜麻色の縦ロールヘアにゴスロリファッションの女性だった。

「征十郎！ お姉様からの電話を勝手に切るとはどういう見なの？」

女性が入ってくるなり、征十郎の胸倉を掴んで玄関の外に放り出した。征十郎の体が人形のように軽々と宙を舞う。石畳に打ちつけられるかと思われたが、しなやかなネコの動きのように体をうまく回転させて着地する。

「甘い！」

間髪いれずに、女性は着地したばかりの征十郎に飛び蹴りを見舞った。さすがの征十郎もよけきれず、今度は石畳の上に背中をしたたかに打ちつけた。

「私に勝とうなんて一億年早い！」

「いや、一億年は姉上も俺も生きていないと思うのだが」

「例えでしょ！ 相変わらずノリの悪い子ね！ そのへらず口がきけないように一生眠らせてやろうかしら」

真顔で突っ込みを入れてくる征十郎に、女性は両手の指の関節をボキボキと鳴らしながら双眸に剣呑な輝きを宿す。

（何なのよ、あの二人は？ 眠る……？）

そんな二人のやりとりを見ながら、リフィーサは睡魔の深淵に沈む直前によく母の言葉を思い出した。

——失敗すると二十四時間は眠ったまま起きないから、くれぐれも気をつけて使うのよ。

第2章

目を覚ましたリフィーサが最初に見たものは、厚みのあるピンク色の唇の端を吊り上げて微笑む女性の顔だった。素顔にロンパースといったラフな格好で雰囲気は違って見えたが、ゴスロリファッションの女性と同一人物だろう。

「ホントに二十四時間目を覚まさなかったわね、リフィーサ・ミシユリーネさん」

「あなた誰？ どうして私の名前を知っているの？」

リフィーサは警戒心を露わにすると、天蓋付のベッドから素早く半身を起す。女性の手にはリフィーサのパスポートがあり、足元には無理矢理開けたと見られるスニーカーがあった。リフィーサが眠っている間に物色したのだろう。日本人はマナーという言葉を知らない人種だと、また悪評のレッテルを貼りつけた。

「私は真崎^{まなき}静華^{しずか}。征十郎の姉よ。単刀直入に聞くけど、あなたバンパイア？」

リフィーサの表情が一瞬強張ったが、すぐにとぼけたように首を傾げた。

「ごめんなさい。私、日本語がよく理解できなくて」

「とぼけたってムダよ。ねえ、どれくらい強いのか私に見せてよ」

静華はリフィーサの小さな顔を驚掴みにすると、そのままベッドに押し倒し、彼女の体の上に馬乗りになる。必死に抵抗するリフィーサだが、静華はビクともしない。

「ヒューマン症候群になると、魔力も使えなくなるのね。つまらない。ま、それを治すために日本に来たんでしょけど」

静華はがつくりと肩を落とすと、リフィーサの体の上から退く。

リフィーサは警戒心を解くことなく、ゆっくりと半身を起こす。そんなリフィーサを見て、静華は朗らかな笑みを見せる。

「安心して。私はあなたの協力者だから」

「協力者？」

「統子ちゃんの遺言ってとこかな。ミシュリーネって名前の人が現れたら異性を紹介してやってくれてね。それから、バンパイアのこと、ヒューマン症候群のこと、血ケツトのこととか教えてくれた。信憑性に欠ける話だったから死に際のばあの戯言かと思っていたけど、まさか本当に来るなんて。さすがの私も驚いた」

「私の正体を知っていて協力すると言っているの？」

「私さ、強い奴と戦うのが好きなのよね」

静華は右拳をリフィーサの眼前に突き出した。

「でも、最近相手になる人間がいなくて退屈していたの。だから、あなたが本当にバンパイアなら一度は戦ってみたいと思ったのよ。強いんでしょ、バンパイアって？」

普通の人間ならば恐怖に慄いて十字架やらニンクやらバンパイアが苦手とされているアイテムを持ち出して騒ぎ立てそうなところだが、静華はまるで大好きなおもちやを目の前にした子供のように瞳をキラキラと輝かせていた。

「ま、そういうわけだから。治るまではこの部屋は好きに使ってちょうだい」

「あなた、人間のくせに変わっているわね」

「そう？ あ、でも、征十郎は何も知らないはずだから、あなたの正体は隠しておくわね。あなたのことは統子ちゃんの初恋の人の孫で、とある難病の治療のために日本にやってきたってことにするか。そこんところよろしくね」

静華はそう言っただけで部屋を出ると、ドアの前で右往左往していた征十郎の耳を引っ張っていった。心配そうにリフィーサを見つめる征十郎と一瞬だけ目が合ったが、どうにも第一印象が悪かったのか、彼女は嫌悪感を覚えてすぐに視線を逸らした。

静華に引つ張られ自室に入ると、征十郎はリフィーサがしばらくの間北見沢家に滞在することになったと告げられた。難病の治療のためと聞いた征十郎だが、いささか納得がいかなかった。あの傲慢な態度はとても病人のように思えなかったからである。しかし、一日中眠っていたところを見ると、元気そうに見えてもやはり何か病気を患っているのかもしれない。しかも、統子と縁のある人間だと知れば尚更放っておくわけにもいかなかった。

「ところで姉上はいつ帰るのだ？」

「当分はここにいろわよ。私はここで寝るから、あんたは父さんたちの部屋で寝なさいね」

「家には真崎先生まさきたしがいるのでないか？」

静華の夫、真崎匡は彼女の女子高時代の担任教師だった。姉の結婚相手は世界一強豪な男だと思っていただけに、世界史を専攻とする極普通の高校教師だったと知った時にはさすがの征十郎も驚愕した。だが、今思えば、当時『ゴスロリの魔女』と恐れられていたあの静華の言動を笑って許してくれる温厚な性格が最強の武器だったのかもしれない。静華が高校を卒業すると同時に結婚し、近所のアパートに住まいを構えている。結婚してもう三年経つが今でもラブな夫婦だ。

「ダーリンはイタリアの何とかってどこで何とかっていう遺跡が見つかったとか連絡があって二週間は戻ってこないの。だから、どっちにしたってここに戻ってくる予定だったのよ」

「そういうことは前もって言ってもらわねば困る」

「何言つてんのよ。昨日そのことを電話で話そうとしたらあんたがすぐに電話を切ったんでしようが！」

正論なだけに何も言い返せない征十郎だった。

「それに、ひとつ屋根の下に若い男と女を二人きりにさせるわけにはいかないでしょ。まあ姉としては十七歳になつてもチエリーなあんたを男にしてあげたいってのが本音なんだけど、相手が相手だけにね」

「何を言っているのだ、姉上。俺は生まれたときから男だ。サクランボなどではないぞ」

「あー、はいはい。そうね、男だね」

剣術のことしか考えてない堅物な弟を見て、静華は嘆息した。

一人部屋に残されたりフィーサは、大きな吐息をもらした。

「あの人間、信じていいのかしら？」

バンパイアであるリフィーサは、人間になつてしまふバンパイア特有の病氣、ヒューマン症候群にかかつていた。なぜそのような病氣にかかつてしまうのか、原因はまだ説明はされていない。

バンパイアであることを誇りに生きてきたリフィーサにとって自分が人間になつてしまったことは屈辱以外の何物でもなかった。

唯一の治療方法は、リフィーサのことを心底愛してくれた人間の男性の血を、自らの牙によつて吸うことだった。しかし、人間になつてしまったリフィーサは、バンパイアの証である牙と人間を惑わす魔力を失っている。

そこで必要になつてくるのが、八十年ほど前に日本で開発された血

ケットだった。それさえあれば三分間だけバンパイア的能力を取り戻すことができた。今では世界各地どこでも入手は可能だが、当時は日本に行かなければ入手することができないくらい希少なアイテムだった。

リフィーサの父もその昔ヒューマン症候群を発症し、血ケットを求めて来日し治療に成功したのだという。その後、日本人バンパイアである母と知り合って大恋愛の末に結婚。日本での滞在中にいろいろと世話になったのが北見沢統子だったらしく、日本に行って彼女に会えと父が助言してくれたのだった。しかし、当の統子はすでに他界し、慇懃無礼な曾孫しか残っていなかった。

（もしかしたら、お父様に血を与えてくれた女性っていうのが北見沢統子だったのかしら？）

父は詳しいことは何も教えてはくれなかった。統子さえ生きていれば重要なヒントを得られることができたかもしれないというのに。

「残る血ケットは、あと二枚……」

リフィーサはワンピースの胸元から小さな赤い紙を二枚取り出し、淡いピンク色のシートの上に置いた。

血ケットの使用限界枚数は三枚。それ以上は使用しても免疫ができてしまい、効果がなくなるということだった。貴重な一枚を焦燥感にかられて使ってしまったことを、リフィーサは後悔していた。しかも、自分の正体を知っているかもしれない謎の青年に。軽薄そうに見えたが、闇色に輝く瞳が何か得体の知れない恐怖のようなものを感ぜさせた。

「けど、人間だと言っていた」

弘臣の存在は気になるが、今はバンパイアに戻る方が最優先である。そのためにも同じミスは許されない。慎重に事を運ばなければならない。

「あの女の言うこともどこまで当てになるかわからないし」

男を紹介してくれると言った静華の言葉など最初から信用していなかった。

だが、翌日になると静華は約束どおり数人の男性——舎弟だと言っていたが——を紹介してくれたのだった。

第3章

「ねえ、私のこと愛してる？」

リフィーサはオールバックヘアの橘洋輔たちばな しょうすけの耳元で甘く囁いた。

アロハシャツから伸びた細い右腕にリフィーサの胸のやわらかさを感じて鼻の下を伸ばした洋輔は、何度もコクコクとうなずいてみせた。

リフィーサが日本に来てから、一週間が経過していた。静華が紹介してくれた男性の中から一番まともそうに思えた洋輔を選び、デートを重ねていた。

夜景が見える山頂の公園のベンチには、リフィーサたちの他にも数組のカップルがいた。ここは数少ないデートスポットのひとつだった。

「なら、私のために死ねる？」

この問いにイエスという答えを聞くまでは、血ケツトは使えない目に見えないもの、つまり人の愛を確認することは難しい。そのため、リフィーサは自分のためなら死ねるという男性を探すことにしたのだった。

（ああ、面倒だわ。どうしてこんなまどろっこしいことをしなきゃいけないのかしら。本当にこんな方法でバンパイアに戻るの？）

疑心暗鬼にかかってしまったリフィーサは胸中で愚痴る。

「オレはリフィーのためなら死ねるぜ！」

洋輔は親指を一本立てて笑顔を見せて答えた。

「本当に？」

「本当だ。死ねと言われれば今すぐにでも死んでみせる！」

「ありがとう。私、とてもうれしいわ」

笑顔とは裏腹に抑揚のない言葉だったが、洋輔を有頂天にさせるには充分だった。

この男は私のことを愛している、と確信した。

リフィーサは洋輔の首に両手を回して顔を近付けると、あらかじめ右掌に隠してあった血ケットを額に貼り付けた。彼女の碧い瞳が真紅の輝きを見せる。薄紅色の唇が開くと、犬歯が覗いて見えた。

リフィーサはおもむろに洋輔の首筋に牙を突きたてた。

「……リフィー」

洋輔は恍惚して、名を呟く。

「！」

リフィーサは洋輔の首筋から牙を抜くと、口に含んだ血を吐き出した。洋輔は惚けたままピクリとも動かない。

「不味い……。まさかこの男、他のバンパイアに血を吸われているの？」

洋輔の首を確認する。バンパイアによるものと思われる、小さな傷跡が二ヶ所あった。

「うかつだったわ」

悔しげに歯噛みする。慎重に事を運んだつもりが、ここにきて凡ミスを犯してしまった。ヒューマン症候群の治療として必要とされる人間の血は、他のバンパイアに血を吸われていては意味を成さない。

しかも、失敗の代償としてまたしても二十四時間眠り続けなければならぬ。

「こんなところで眠るわけには……」

リフィーサは急激に襲いくる睡魔と闘いながら、ふらつく足取りで公園を出ようとする。しかし、数歩進んだところで、完全に睡魔に指導権を奪われた。自由を失った体はまるで糸の切れたマリオネツトのように崩れ倒れていく。

そんなリフィーサの体を支えたのは、草の茂みから現れた静華だった。

静華に軽々と抱えられて公園を出て行くリフィーサを見つめる少女がいた。髪は肩のところで切りそろえられ、カップルばかりの公園に来るにはまだ早い年頃と思えるあどけない顔をしていた。真紅色の瞳が妖しく輝き、この暑さの中で瞳と同じ真紅色のコートで全身を包み、涼しげな笑みを浮かべていた。

少女はベンチに一人取り残され未だに惚けている洋輔の隣に座り、くすくすと小さな笑い声を立てた。

「洋輔はもう紗耶のものなんだよね。あんたには人間の血は一滴も吸わせはしない。一生人間のままでいればいいんだ」

少女——望月紗耶もちづき せうやはその柔和な笑顔とは対照的に冷淡な声でそう呟くと、洋輔の首筋に自分の牙を突きたてた。

リフィーサが目を覚めたのは翌日の夜のことだった。

「ねえ、バンパイアに戻れた？」

開口一番に静華は瞳を輝かせて聞いてきたが、リフィーサは黙って首を横に振った。

「どういうこと？ 昨日のデートを見た限りでは血を吸っていたみたいだったけど」

「他のバンパイアに血を吸われた人間の血では効力はないのよ。まさか他のバンパイアに邪魔されるなんて思ってもみなかった」

日本人バンパイアを母に持つリフィーサは、この土地にもバンパ

イアがいることは承知のはずだった。しかし、焦燥感が冷静な判断力を鈍らせていた。

静華の機転で——興味本位でデートを覗き見していただけたような気もするが——公園で二十四時間寝ることは免れたが、貴重な血ケツトをまた一枚ムダにしてしまったことが悔やまれてならなかった。「リフィー以外にもバンパイアっているのね。まあ不思議じゃないか。でも、私の舎弟に手を出すなんて許せないわね」

静華は両手の指の関節をボキボキと鳴らし、見知らぬバンパイアに殺意を漲らせていた。が、携帯電話から何やら可愛らしい着信音が鳴り響くと、一瞬にしてその殺意は木っ端微塵に砕け散り、頬を紅潮させ鏡の前で身なりを整え始める。

「ダーリンからなの。ちょっとごめんね」

声色まで変わった静華は、ウインクすると軽やかなステップで部屋を出て行った。

静まり返った室内で、リフィーサは手の中に残った一枚の血ケツトを握りしめた。

「あと一枚……」

不安が心を支配する。もう失敗は許されない。失敗すれば人間として短い一生を送ることになるだろう。それならば今ここで死を選ぶ方がマシだ。それだけ彼女はバンパイアであることに誇りを持っている。

「静華に紹介してもらった男に好みのタイプはいなかったし、こうなったら当初の予定通り自分で男を捜しに行くしかないわ」

静華が男性を紹介してくれていたおかげで怠慢になっていたが、本来は自分で特効薬なる男性を探すつもりでいたのだ。人間など当てにせず最初から自分で探すべきだったと自責の念にかられた。

そう思うところでのんびりと寝てなどいられない。今すぐにもでも探しに行かなければ。そのためには、まずは汗でベタついた体と二十四時間眠っていた脳みそをすっきりさせるためシャワーを浴びに行こうとしてリフィーサは部屋を出た。

すると、部屋の前でまたしても右往左往している征十郎に出くわした。どうやら心配で居ても立ってもいられなかったらしい。

「リフィーサ、もう大丈夫なのか？」

「別に」

難病の話信じて身を案じている征十郎を鬱陶しく感じ、リフィーサは短く答えた。それでもしつこく心配してくる征十郎を振り払って浴室に向かおうとするが、めまいを感じて思わず壁にもたれかかる。

「顔色が悪いぞ。医者に診てもらった方がいいのではないか？」

「平気よ。ちよつと血が足りないだけだから」

消え入りそうな声でリフィーサがそう言つと、征十郎は大仰に驚いてみせた。

「そ、そうだったのか。早く言ってくればよかったものを。まだスーパーは開いている時間だな。よし、すぐに出しに行ってくる！」

征十郎は玄関に向かって走り出した。

「何なの、あいつ？」

リフィーサは征十郎の背中を一瞥して首を傾げた。

征十郎は築地塀の曲がり角で、出会い頭に赤いコートの少女と軽く肩がぶつかった。

「すまない、大丈夫か？」

「あんた、あの家の人？」

少女は築地塀の向こう側に見える家屋を指差した。

「ああ、そうだが」

「ふーん」

少女の瞳が妖しい輝きを放つ。しかし、征十郎は少女が放つ禍々しい眼光に物怖じする様子はなかった。逆に少女の方が啞然としているように思えた。

「悪いが、俺は今猛烈に急いでいる。入門希望者なら大歓迎だが、今日はもう遅い。ご両親が心配しているぞ。一度家に戻って、明日の朝にでもまた訪ねて来てくれ」

征十郎は少女の頭をなでると、猛ダッシュでスーパーに向かって駆け出した。

少女は忌々しげに征十郎の背中を見つめ、怒りに体を震わせて両拳を強く握りしめた。

「紗耶のことを子供扱いしたあげくに魔力が通用しないなんて……。あいつ、許せない！ 絶対に紗耶のものにしてやるんだから！」

日本のお風呂が気に入って、つつい長湯をしてしまったリフィーサが部屋に戻ろうとしていると、征十郎に呼び止められた。

「夕飯の支度ができているぞ」

「知らないわ。私、これから出掛けるの」

「ならば、尚更食べておいた方がいい」

「いらないうって言うているでしょ」

「そうはいかん」

征十郎はリフィーサを抱きかかえると、居間に向かって歩き出す。「ちよつと何するのよ！ 下ろしなさい！」

「ダメだ。二十四時間眠ったままで何も食べてはおらんのだろう。少しでも食べて体力をつけねば病魔には勝てぬぞ」

確かに今のリフィーサには征十郎に抗う体力すら残っていないかつ

た。

「わかったわよ。だから、下ろしてちょうだい」

リフィーサは仕方なく征十郎につき添われる形で食事が用意されている居間へと歩き出した。

座敷のその部屋には不似合いなダイニングテーブルがあった。座卓で食事を取るのはリフィーサには不便だろうということで、静華が便宜を図ったものだった。

ダイニングテーブルには四人分の食事が用意されていた。疑問に思ったがすぐにその答えにたどり着いたリフィーサは、ダイニングテーブルに当たり前のように腰掛けている人物を見て不快感を露わにした。

「こんにちは、リフィーちゃん」

弘臣がダイニングテーブルに頼杖をついて満面の笑みで迎えた。

リフィーサは物憂げな表情で静華の横に座った。

「すまん、リフィーサ。帰れと言ったのだが」

「そんな言い方はないだろう。征十郎がスーパー袋提げてダツシュで帰っていくのを見かけたから、静華師範が戻ってきているんじゃないかと思って馳せ参じたっていうのにさ。いやー、師範はいつ見てもお美しいですねえ」

「弘臣ったら相変わらず正直な子ね。でも、私のことを師範と呼ぶのはもうやめてちょうだい。今は普通の主婦なんだから」

「普通の主婦は弟が作った料理を毎晩もらいには来ないだろう」

征十郎はボソツと小声で愚痴をこぼす。普段ならここで静華の右ストレートが炸裂するところだが、どうやら真崎から電話があったおかげで上機嫌らしく、征十郎の愚痴も笑ってスルーした。

「さあ何にもないけど好きなだけお食べなさい」

「姉上！」

「いいじゃないの。たまには大勢で食べる方が賑やかで美味しいでしょ。それになんだかんだ言いながらちゃんと弘臣の分も用意してあるんだし」

征十郎は渋々と、だが手際よく弘臣の分のご飯を茶碗に盛る。

「レバーの煮付け、しじみの味噌汁、ほうれん草のおひたし、れんこんのきんぴら。どれも鉄分たっぷりの料理ばかりだねえ」

「血が足りんと言っては姉上に毎月こういった料理ばかり作らされていたのを思い出したのでな。これを食べればリフィーサも元気になるだろう」

「リフィーちゃんは幸せ者だねえ」

リフィーサは完全に弘臣の存在を無視して、料理を口に運んだ。

和食はイギリスでも何度も食べていたが、征十郎の料理は格段に美味しく思えた。リフィーサの体を気遣い、庭で採れた新鮮な野菜を使ってバランスの良い料理を作ってくれていた。征十郎は嫌いだ、彼が作る料理は好きだった。

「これだけ征十郎の世話になってるんだから、元気になった暁には何かお礼をしなきゃねえ、リフィーちゃん」

リフィーサは無言で弘臣を睨みつけた。

「弘臣、俺は貴様から礼を受けた記憶は一度もないがな」

「やだな、征十郎。俺とお前の厚い友情の間にそんなものは必要ないだろう。っていうか、今は俺のこと言ってるんじゃないんだけだな」

弘臣はやぶへびだと肩をすくめて、食べるだけ食べてとさっさと帰っていった。

リフィーサも食事を終わると、小さく「ごちそうさま」と告げて居間を出た。出掛けるつもりだったが、外で弘臣に出くわすと面倒なことになりかねない。出掛けるのを諦念して部屋に戻り、その日は早く寝ることにした。

第4章

その日の朝は珍しく快適な目覚めを迎えることができたリフィーサは、北見沢家の日本庭園さながらの手入れの行き届いた中庭を散策した。といつても、庭の半分は征十郎の自家菜園になっていたが。朝の空気はひんやりとして心地良かった。朝露に濡れた真つ赤なトマトが太陽の光を浴びてきらきらと輝いていた。日本に来てからこんなにのんびりとした気持ちになったのは初めてのような気がした。

これからの行動を考えながら歩を進めていくと、どこからか掛け声のようなものが聞こえてきた。声を辿っていくと、離れの道場に着いた。格子の小窓から中を覗いてみると、上半身裸で竹刀を振る征十郎が見えた。朝稽古をしているようだった。

右足を踏ん張り、鍛えられた二の腕を振り下ろすと、竹刀が音を立てて空を切る。その動きのひとつひとつが舞のように美しく思えた。

リフィーサは時が経つのも忘れて見入っていた。

何分経っただろうか。あからさまに征十郎と目が合った。リフィーサはバツが悪くなつてすぐに逃げようとしたが。

「リフィーサ、そんなところで隠れて見ずとも、さあ遠慮せずに中に入ってくれ」

と、征十郎に強引に道場へ引き込まれてしまう。いつもなら征十郎の手を振り払って断るのだが、なぜかそれができなかった。心のどこかでもう一度今の演武を見てみたいと思っていたのかもしれない。しかし、広い道場に征十郎ひとりというのは何やら侘しいものを感じる。神棚の横には歴代の当主の写真が飾られていた。その下には、征十郎と弘臣の名前が書かれた木札があった。

「他に人はいないの？」

「昔はたくさんいたが練習に耐え切れず皆やめていった。今では門

下生は弘臣だけだが、サボってばかりなのでいないも同然だがな」

「なら、力づくで来させればいいじゃない」

「そうはいかん。俺が剣道を好きだからといって好きでもない人間にそれを無理強いしても好きになつてはもらえんだろ」

征十郎は竹刀を振り下ろしながら苦笑する。

「そうかしら？ 人間なんて単純な生き物なんだから簡単に操れるけど」

「リフィーサのような美人が門下生になつてくれればまた人も増えるかもしれないがな」

「リフィー」

「？」

「みんな私のことはそう呼ぶわ。だから、これからはそう呼んでちょうだい」

「そうか。では、そう呼ばせてもらおう」

リフィーサの言葉の意味を理解したのかどうかはわからないが、征十郎は屈託のない笑顔を見せた。口元から覗く白い歯が輝いていた。

（私つたら、どうしてあんなこと言ったのかしら？）

自分が自分ではないような不思議な感覚に、リフィーサは狼狽した。

「そういえば、リフィーの祖父殿は大ば様の初恋の人だと聞いたが、息災であろうか？」

（そういうことになつてゐるんだつたわね）

静華が勝手に考えた設定のため、リフィーサは返事に困惑する。

「たぶん、元気よ。当分会つてないからわからないけど」

「そうか、それは良かった。俺はまだ小さかったからよくは憶えていないのだが、姉上の話によると大ば様は一人娘だったのだが、初恋の人を慕い続けて結婚はせず、門下生を養子にとって跡を継がせたそうだ。先祖代々受け継いできたこの道場を潰すわけにはいかないと言って。俺はそんな大ば様を尊敬している。だから、この

道場を守るのが俺の役目だと思っている。ん？」

征十郎はふと疑問に思った。

「大ば様はずいぶんと年下の男性を好きになったものだな」

「そ、祖父は結婚するのが遅かったから。年はそんなに変わらないと思うわ」

実際は父親なのだが、リフィーサは辻褄を合わせるために適当な嘘をつく。それが妙に後ろめたく感じ、話題を変えようとする。

「そういえば、征十郎のご両親は？」

「武者修行の旅で世界を渡り歩いている。日本武術の宣伝も兼ねてな」

リフィーサは征十郎と初めて会った時にそんなこと言っていたのを思い出した。

「ずいぶんと時代錯誤なことをしているのね」

「我が家はこういうわけか女性が強くてな。婿養子で肩身の狭い父は母に勝つために必死で修業をしているのだ。言っておくが二人の仲は決して悪いわけではない。息子の俺が見ていて恥ずかしくなるくらい仲は良い。だから、母は父のためにいつでも試合ができるようにと常に旅に同行している」

「変な家族ね」

「そうか？ 俺には自慢の家族だ」

征十郎は恥じることなく胸を張って断言した。リフィーサはそんな征十郎を見て思わず小さな笑みをこぼす。

「初めて笑ってくれたな」

「あ……」

リフィーサは頬を紅潮させる。

「やはり笑った方が可愛いな」

「別に笑ってなんかいないわよ」

リフィーサは征十郎に背を向けた。これ以上羞恥をさらしたくなかった。しかし、そんなリフィーサの気持ちを知ってか知らぬか、征十郎は再び竹刀を振り始めた。

「俺も大ばば様のように永遠の愛を貫いてみたいものだな」

征十郎が一生を賭けて愛する女性はどうな人だろうか。そんな考えがリフィーサの脳裏をよぎり、胸を締めつけた。

「さて、今朝の朝稽古はここまでにして朝食の準備でもするか。遅れると姉上がうるさいからな」

征十郎が竹刀を振る手を止めた。

「はい、これ」

リフィーサはスカートのポケットからバラの刺繍が施されている絹のハンカチを取り出し、征十郎に差し出した。

「汗、拭きなさいよ」

「こんな高価なハンカチで汗を拭くのはもったいないぞ」

「気にしないでいいわ、安物だから」

征十郎は破顔してハンカチを受け取ると、額の汗を拭いた。

「意外と優しいのだな。最初は気の強いわがままな女かと思っていたが」

「失礼ね。私にだって大和撫子の日本人の血が半分入っているんですからね」

「どうりで日本語が上手いわね。あまりに流暢に話すものだから、異人であることを忘れていたぞ」

普通は忘れないと思うけど、と胸中で突っ込みを入れるリフィーサだった。昨日までであれば揶揄されたといつて憤慨して平手打ちのひとつでもお見舞いしていただろう。しかし、今のリフィーサの心に怒りという感情はわいてこなかった。

「今度はちゃんとしたお礼の品買ってくるから」

リフィーサは小さく口ごもる。昨夜の弘臣の言葉が気になっていたのだった。

「何か言ったか？」

「別に。じゃあ私は部屋に戻るから」

リフィーサは征十郎の顔を直視することができず、足早に道場を去った。

「いい男見つからないわね」

ファーストフード店でアイスコーヒーを飲みながら、静華がぼやく。

「静華、私はナンパに来ているわけではないのよ」

「わかってるって。でも、同じ血を吸うならイケメンがいいじゃない。っていうか、いい男どころか若い男が全然見当たらないんだ」

一人でも大丈夫としつこく断ったのだが、静華は頑として譲らず、結局彼女が運転する車で大型ショッピングモールにやって来たリフィーサだった。人が大勢集まるところならどうにかなるだろうと思っていたのだが、平日とはいえ夏休みだというのに特効薬となりそうな男性が一人もいなかったのだ。男たちを悩殺するためにキヤミソールとミニスカートという着慣れぬ大胆な服装もこれではまったく意味がない。

「そういえば、あの日以来洋輔たちとも全然連絡が取れないし。まったく男どもはどこに消えたんだが」

静華は口の中に含んだ氷をガリガリと噛み砕いた。

「仕方ない。この際征十郎で我慢してくれない？ 姉の私が言うのもなんだけといい男よ。剣道一筋の堅物鈍感男はあるけどね」

「な、何を言い出すのよ、静華。そんなの無理に決まっているでしょ。あいつが私のことなんか愛してくれるわけがないもの」

静華の突拍子もない提案に狼狽するリフィーサ。

征十郎の血を吸う。

そんなことは考えてもみなかった。しかし、リフィーサの正体を知

つたら征十郎はどんな顔をするだろうか。やはり他の人間同様に畏怖の目で見るところだろうか。そう思うと、胸がチクリと小さな痛みを訴えた。

「私のことなんか、ねえ。今朝は何だかいい雰囲気だったけど」

「み、見てたの？」

「私もたまには朝稽古しようかと思って道場に行ったら二人して仲良く話してんだもの。あまりのラブラブぶりに声もかけられなかったわよ」

静華がニタリと笑う。

誰にも見られていないと思っていただけに、リフィーサは今朝のことを思い出し、頬を赤く染める。

「静華の見間違いよ。どうして私がいっつななんと。まあ私は別に……バンパイアに戻るなら誰でもかまわないんだけど」

「それはどうかなあ？」

いきなりテーブルの下から弘臣の顔が現れた。驚いたリフィーサは思わず席を立つ。その拍子にテーブルの上にあったアイスコーヒのグラスが倒れ、茶色い液体が静華の方に飛び散った。それがゴスロリの衣装に、僅かな染みを作った。

「弘臣、あんた相変わらず気配を殺すのが得意ね」

鼻息を荒くして静華はげんこつで弘臣のこめかみをぐりぐりと押さえつけた。しかし、弘臣は痛がる様子でもなく、へらへらと笑っていた。

「すみません、以後気を付けますよ。ところで、気になりませんか？ 健全な若人が昼間から全然見当たらないわけ」

「あんた、何か知ってるの？」

静華の問いに、弘臣は目を細めた。

征十郎は裏庭に干したりフィーサのハンカチを見つめていた。額の汗を拭いた時にはのかな芳香が鼻孔をくすぐった。あの時感じた心躍るような感覚は何だったのだろうか。試合前の高揚感とはまた違う気がした。

（何なのだ、この気持ちは？）

縁台に腰掛け、青空を埋め尽くしている入道雲を見上げる。生暖かい湿った空気と共に、雨雲が白い雲を徐々に侵食していく。

「雲行きが怪しくなってきたな。洗濯物を取り込んでおくか」

征十郎はリフィーサのハンカチはいつでも返せるようにと道着の懷に収めた。そして、午後からの稽古を始めるため道場に入ったのだが、脳裏にリフィーサの顔が浮かび剣術に集中できずにいた。

「昨日の屈辱晴らさせてもらうから！」

女性、いや甲高い少女の声に、征十郎は目線を動かす。道場の戸口に昨夜の赤いコートの少女が立っていた。今日もまた同じ赤いコートに身を包んでいる。違うところがあるとすれば、つばの広い大きな帽子を被っているところぐらいだろう。

しかし。

「昨日？ どこかで会ったか？ だが、どこの子は知らんが、人様の家の敷地内に勝手に入ってくるとは感心せんな。入門希望者なら玄關の呼び鈴を鳴らしてからにするのだな」

征十郎は少女のことをまったく憶えていなかった。

「最近、この辺りの若い男が次々と真っ赤なコートを着た中学生くらいの少女バンパイアに襲われているんです。しかも、餌食になった奴らは何かに取り憑かれたような顔をして少女について行っていましたよ」

弘臣は嫌がるリフィーサの横に座ってアイステイーを飲みながら、全く緊迫感のない明るい声でしゃべる。

「まるで見てきたかのような口ぶりね」

「見ていましたよ。静華さんのかわいい舎弟さんたちが襲われるところも」

「どうして助けなかったのよ？」

静華は思わず声を荒げる。

「かわいい女の子が襲われていたら助けますけど、野郎を助けただって何のメリットもないでしょ。それに俺にもしものことがあったら大勢の女性が悲しみますし」

「大丈夫よ、少なくとも私は悲しまないから」

「わー、キツイなあ今の一言」

弘臣は肩をすくめる。

リフィーサは愕然とした。弘臣の言っていることが真実ならば、もうこの町にはヒューマン症候群の特効薬となる男性はいないということになる。約二名を除いてだが。

「当然、そのバンパイアのアジトの場所はつかんでいるんでしょうね？」

「一応は。でも、そっちに行くより先に家に戻った方がいいんじゃないですか？ 若人は今や俺と征十郎だけですから」

「アホ！ そういう大切なことは早く言いなさいよね！」

静華が苛立たしげに吠えた。

リフィーサは弘臣の首根っこを掴んだ静華と共に慌てて大型ショッピングモールを後にした。

降り始めた雨が、リフィーサの不安を駆り立てた。

(征十郎、どうか無事でいて)

その頃、征十郎は目の前でわめき散らす紗耶に困惑していた。

「どうして？ どうして紗耶の魔力があんたに通用しないの？」

「さつきから何を言っているのだ。そんなに腹を立てずとも入門希望なら両親といっしょに来いと言っているだけではないか」

「だから言ってるでしょ！ 紗耶を子供扱いするなって！ これでもあんたの数倍は長く生きてんのよ！ こうなったら力づくであんたの血を吸ってやるんだから！」

紗耶は真紅の双眸に剣呑な輝きを宿すと、口笛を吹いた。するとどこからか現れたのか、大勢の青年が一斉に道場に侵入してきた。その中には高校のクラスメイトや静華の舎弟といった見知った顔がいくつもあった。その瞳はどこか虚ろで焦点が定まっていなかった。しかし、彼らは迷うことなく征十郎との距離を徐々に縮めてくる。まるでホラー映画に出てくるゾンビのような足取りで。

「一体何がどうなっているのだ？」

次々と襲い来る彼らを、征十郎は持っていた竹刀でなぎ払う。正直、弱すぎて相手にならなかった。

「もう何やってんのよ、この役立たず！」

紗耶はヒステリックに叫ぶと、足元に倒れた彼らを足蹴にする。

「よさないか。おぬしの目的が何かは知らぬが、そんなことをするものではないぞ」

「うるさい！ 紗耶に命令するな！ …… そうだ、いいこと思っていた。あんたが紗耶のいうこと聞いてくれたらこの男たち解放して

あげてもいいよ」

「どういう意味だ？」

「紗耶、吸血鬼なの。あんたの血を吸わせてくれたらこの男たちにかけて魔力を解いてもいいって言ってあげてるのよ」

いきなり吸血鬼だと言われても、征十郎にはわからに信じられなかった。しかし、嘘をついているようにも思えなかった。実際ここにいる人間たちは何かに取り憑かれたよう虚ろな表情をしている。放っておくわけにはいかない。

「わかった。好きにするがいい」

征十郎はその場に座すると、竹刀を置いて道着を脱ぎ捨てた。懐にあったハンカチがひらりと紗耶の足元に舞い落ちる。

「何、そのハンカチ。バラの刺繍なんか入って趣味悪い」

「これはリフィーが汗を拭けと俺に貸してくれたものだ。悪く言うことは例え子供とて容赦はせんぞ」

征十郎は紗耶をキッと睨みつけた。

「あんた、もしかしてあの女に惚れてるの？」

「……………」

征十郎は否定しなかった。いや、できなかったのだ。自分の中にあるこの感情がリフィーサへの愛であると気付いた瞬間から。

紗耶はそんな征十郎を嘲笑う。

「なら、いいこと教えてあげる。あの女はね、ヒューマン症候群っていう病気にかかって今は人間になってるけど、ホントは吸血鬼なのよ。ヒューマン症候群はね、自分のことを愛してくれた異性の血を飲めば治るの。でも、他の吸血鬼が吸ってしまった人間の血を吸っても効果はない。これってどういう意味かわかる？ 紗耶がお前の血を吸ってしまえばあの女はもう二度と吸血鬼には戻れない」

「しかし、おぬしの話からすると、今のリフィーはそのヒューマン症候群という病気のせいで吸血鬼ではないのだろう。どうやって人間の血を吸うというのだ？」

「血ケットっていう便利なアイテムがあるのよ。それを使うとほん

の数分だけど、吸血鬼になることができる。けど、失敗すると副作
用で二十四時間は眠ったままになるのよ」

「そうだったのか」

リフィーサが二十四時間眠ったままになるのは病気のせいではな
く、血ケツトというものを使ったための副作用だったと、征十郎は
知った。自分はリフィーサのことについて何ひとつ知らされてい
なかった。信用されていなかったということだろうか。

「もしかして何も知らなかったとか？」

征十郎は紗耶の言葉にあからさまに動揺してしまう。己の心の弱
さを叱責した。

「それでも愛してるって言えるのかしら？」

「俺はリフィーを愛している。吸血鬼だろうが人間だろうがかまわ
ない。俺は彼女のすべてを受け入れると今心に誓ったのだ」

征十郎は真摯な眼差しで答えた。

「バツカじゃないの。あの女は化け物なのよ」

「おぬしも同じ吸血鬼であろう。自分を卑下した言い方をするもの
ではない」

「黙れ！ 人間風情がわかったような口をきくな！」

紗耶は怒りにまかせて征十郎の頬を引っ叩いた。

「どうしてそこまでリフィーを目の敵にするのだ？」

征十郎は紗耶から深い憎しみを感じた。

「昔あの女の母親と紗耶のママは一人の男性を奪い合った。そして、
ママは負けた……。パパと結婚した後もママはその男のことが忘れ
られなくて家を出ていった。パパもどこかに消えちゃって、紗耶は
一人だけになったんだ！」

「だからといってリフィーを恨むのは筋違いというものだろうか？」

「あの女を吸血鬼に戻れなくしてやった方が母親にも大きなダメー
ジを与えられるって、弘臣が言ったから」

「弘臣？ なぜここであいつの名が出てくる？」

「と、とにかく、あんたにも紗耶の復讐の協力をしてもらうからね」

紗耶は慌てて話を戻す。

「復讐なんて意味のないことはするな」

「うるさいうるさい！」

紗耶はヒスを起こして征十郎の頬を何度も叩く。征十郎は黙ってじつと痛みに耐えた。

逆に叩いていた紗耶の手の方が根を上げた。息を荒げながら、大きな双眸を涙で潤ませる。

「あんたは大人しく紗耶の言うとおりにしていればいいのよ」

紗耶は男たちを使って征十郎を押さえつけてロープで縛りつけた。体の自由を奪われた征十郎は観念し、目をゆっくりと閉じた。

紗耶は征十郎の首筋に自らの牙を突きたてようとして——止めた。

「いいとこだったのに」

紗耶はゆっくりと振り返ると、道場に入ってきたリフィーサを忌々しげに睨みつけた。

第5章

「征十郎！」

リフィーサは征十郎の傍らにいる紗耶に殺意を向けた。
ほんの少し遅れて静華も道場に入ってくる。

「邪魔な人間ね。あんたの相手はこいつらで充分だわ」

紗耶が吐き捨てるように言うと、征十郎になぎ倒されて気絶していた男たちがのっそりと立ち上がり、ゆらりと体を揺らしながら静華の方に向かっていく。

「ゴスロリの魔女と言われた私を甘く見てもらっては困るわね」

静華は口の端を吊り上げて冷笑すると、一歩前進する。

まさにそれは一瞬の出来事だった。

リフィーサには何が起こったのかまったく理解できなかった。気が付けば、道場には幾重もの男たちの人間ピラミッドが完成していた。
ちなみに、静華の衣服に乱れはない。

楽勝、と高笑いする静華を横目に、リフィーサは白目を剥いている洋輔の姿を見つける。

「この人たちの中には静華の舎弟もいたんじゃないの？」

「確かにそうだけど、私はもう人妻。私の肌に触れていいのはダーリンだけ」 例えかわいい舎弟たちであっても私に牙をむく奴は全力でぶっ潰す！」

静華は拳を高々と掲げて公言する。

さすがのリフィーサも洋輔たちに同情せずにはいられなかった。
どうやらそれは征十郎も同感だったらしい。人間ピラミッドを見て悲哀に満ちた表情を浮かべていた。

「ホント、役に立たない人間たち。でも、おかげでいい手駒を見つけた」

紗耶は舐めるように静華を見つめた。

「クソ生意気なガキだね。ここらで大人のルールってのを教えてあ

げた方がいいのかしら？」

静華は紗耶の胸倉をつかんで、その赤い双眸に啖呵を切った。

「静華、その子の目を見てはダメ！」

リフィーサが叫ぶと、紗耶はくくつと喉を鳴らして笑った。

「残念でした。もうこいつは紗耶のことしかきかないよ」

「誰があんたのいうことしかきかないって？」

静華は鋭い眼光を放った。

「どうして？ あの男といいこの女といい、どうして紗耶の魔力が通用しないの？」

紗耶は征十郎と静華を交互に見やり、信じられないといった面持ちで唇を噛みしめた。

「私たち武道家にそんな変な術がきくわけがないでしょ。日々鍛錬してんのよ！」

「最近はその鍛錬も怠っていたんじゃないですか？ こんな簡単に俺に後ろを取らせるなんて」

いきなり背後から現れた弘臣がリフィーサの喉もとに突然サバイバルナイフを押し当てた。隣にいた静華が舌打つ。

「もしやと思っていたが、やはり黒幕は貴様が、弘臣」

「おや、鈍感な征十郎くんにしてはよく気がついたね」

「この紗耶という少女が貴様の名前を口にしたからな。すべては貴様の入れ知恵か？」

「何だ、そういうことか」

弘臣は悪びれもせず、のほほんとした口調で呟く。

「どういふことが説明してくれない？」

「すみません、静華さん。かわいい女の子が困っていたら何とかしてやりたいと思うのが男でしょ？」

「ここにもかわいい女の子がいるでしょうが」

「俺、人妻には興味ないんですよね」

「弘臣、あんた殺されても文句は言わないでよ」

静華が剣呑なセリフを笑顔で言くと、殺気を漲らせて攻撃態勢に

入ろうとする。相手が凶器を持っていようが関係なかった。

「言いませんよ。でも、静華さんが動くよりもナイフの切っ先が彼女の首を切り裂く方が早いと思いますよ」

あくまで笑みを絶やさない弘臣。

臨戦態勢を整えていた静華は、強く握りしめたままの拳をゆっくりと下げた。ここで下手に手を出せば、弘臣は躊躇なくリフィーサの喉笛をサバイバルナイフで切り裂くだろう。

「弘臣、貴様見損なつたぞ！ 女に節操がなくていいかげんな奴だとは思っていたが、そこまで非道なことをするとは」

「これはお前のためでもあるんだけどな」

「黙れ！ 言い訳など聞かん！ 貴様などもう友ではない！」

征十郎は悲痛な面持ちで怒りに体を震わせていた。ロープで縛られていなければ、間違いなく弘臣を殴り倒していただろう。

「愛情だの友情だのって、ホント人間は愚かな生き物だね。まあその方が利用しやすくて助かるけど」

「そんなことないわ！」

それまでずっと黙っていたリフィーサが紗耶の言葉を否定した。

「人間は……征十郎は堅物だけど何事にも一生懸命でとても優しくて、誰よりもステキな人間だわ！」

「何、虫唾が走るようなこと言ってるの？ まあいいわ。あんたに惚れたっていうこの男の血を紗耶が先に吸ってやる、あんたの悔しがる顔を見ながらね」

紗耶が征十郎の顔に手が触れた瞬間だった。

「俺に触るな！」

征十郎の声と同時に紗耶が尻もちをつく。征十郎を押さえつけていた青年たちもその場に倒れ伏す。紗耶は何が起きたのか理解できず、茫然としていた。

「さすがは私の弟」

「これが火事場のバカ力ってやつかな？ それとも……」

征十郎の放った気に当てられたことに気づいたのは、おそらく静

華と弘臣だけだろう。

征十郎は立ち上がると体の自由を奪っていたロープを引き千切り、すばやく移動し、リフィーサの眼前へと迫った。

「リフィーサからその汚い手を離せ！」

「トイレから出たら手はちゃんと洗っているんだけどなあ」

おどけてみせる弘臣に、征十郎はするどく右拳を突き出した。リフィーサは息を呑んだ。

征十郎がリフィーサの首に押し当てられていたサバイバルナイフの刃の部分を握りしめた。赤い液体が征十郎の腕を伝って床へと滴り落ちていく。

「征十郎、手が……」

「気にするな。愛する女を守るのは男の役目だ。右手の一本くらいたいしたことない」

征十郎は気丈な笑みを見せた。

「リフィーサ、今すぐ血ケットとやらを使って俺の血を吸え！」

「あなた、私の正体を知ったのね……」

リフィーサはこんな状況にもかかわらず、自分を見る征十郎の目が変わっていないことに安堵していた。そして、征十郎に対する自分の気持ちにも気づき始めていた。だからこそ、血ケットを使うことができなかった。

愛する人と同じ人間でいたい。

そう思うと、涙が溢れて止まらなかった。

「ダメだわ。私にはできない」

「それではおぬしの病は治らないぞ。吸血鬼に戻ればこの窮地を脱することも可能だろう？」

「もう、いいの。私……もうバンパイアに戻れなくてもいいの」

「リフィーサ……」

「はい、ラブシーンはそこまで」

弘臣はサバイバルナイフの柄を手放すと、紗耶のそばへと歩み寄る。

「征十郎、ひとつ聞いていいかな？ お前はリフィーちゃんがバンパイアに戻ったとしても、さっきと同じことが言えるかい？」

「当然だ。リフィーが人間であろうと吸血鬼であろうと関係ない。例えば世界中の人間を敵に回しても俺は全力でリフィーを守る！」

弘臣はヒューと感服したように口笛を吹くと大仰に拍手した。

「俺たちの負けだ。完敗だよ」

弘臣の敗北宣言に征十郎たちは啞然とする。かたや、紗耶は認めないといった感じだ。

「何を言ってるの、弘臣。せつかくのチャンスなのに」

「引き際が肝心だよ。それにもうキミは」

「やだ！ 紗耶はあの男の血を吸うんだから！」

紗耶は弘臣が制するのも聞かず、征十郎に飛びかかり首筋に噛みついた。

しかし。

血は吸えなかった。

「どういうこと？」

「おぬし、気付いておらんのか？ 自分の牙がなくなったことに」
紗耶は征十郎の言葉を聞いて、おもむろに自分の歯を触って牙の有無を確かめると崩折れた。自分がヒューマン症候群にかかるとは思いもしなかったのだろう。かなりのショックを受けているようだった。

「んじゃ人間になったってことで、お仕置きタイムといこうかね、お嬢ちゃん」

殺意に満ちた双眸で静華は紗耶を見下した。

「許してやってくれないか、姉上。聞けば紗耶も辛い身の上の持ち主のようだし」

「何言ってるの。大人のルールというものをちゃんと教えておいてやらないと」

「私からもお願いするわ、静華」

「ったく、お人好しだね。まあ当事者のあんたたちがそう言うなら

仕方ないわね」

静華は泣き崩れる紗耶の頭を軽く小突く。

「あんたも自分を愛してくれる男を捜してみることだね。ま、そんな奇特な男がいればの話だけど」

「大丈夫よ。案外身近にいたりするものだから」

静華とリフィーサは弘臣を見た。

「俺の愛は重いから一人で抱えるのは大変だよ」

いつもへらへら笑っている弘臣もこの時ばかりはどこか寂しそうな顔をしていた。

「征十郎、リフィーちゃんのこと大事にしるよな」

そう言い残して弘臣は紗耶を連れて姿を消した。

後日談ではあるが、弘臣はその昔人間とバンパイアが共存するための組織を設立した人間の子孫だった。バンパイアの世界にも精通していた弘臣は、紗耶の復讐心を利用して征十郎とリフィーサの仲を取り持ちたかったのだという。その理由は「面白そうだったから」の一言で、静華に半殺しの目に遭ったのはいうまでもなかった。

道場の片付け——大半は紗耶の魔力から解放された青年たちがやった——が終わった頃には、すっかり空は茜色に染まっていた。

右手に包帯を巻いた征十郎は、傍らに立つ愛しい金髪の女性を見つめた。

「リフィー、血ケツトはもう一枚あるのだろうか？ それを使えば……」

リフィーサは征十郎の目の前で最後の血ケツトを破り捨てた。

「言っただでしょう。私はもうバンパイアには戻らないって。征十郎と共に老いて死んでいくことを選んだの。お母様もお父様も許してくれると思うわ」

リフィーサが目を閉じると、征十郎は狼狽した。

「リフィー、すまない。こういう時に男はどうすればいいのか俺にはわからぬのだ」

「まったく、どこまでも失礼な奴ね。もういいわ。黙って目を閉じて」

「こうか？」

征十郎はきつく目を閉じた。

リフィーサはほんの少しだけ背伸びをする。

そして、二人は唇を重ねた。

おわり

第5章（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8867u/>

吸血鬼に恋してみない？

2011年7月19日17時16分発行